

## 角川武蔵野ミュージアム マンガ・ラノベ図書館児童書コーナー 読み聞かせイベント報告

● 渡 部 英 美

### 内容概略

2022年度、角川武蔵野ミュージアム（所沢市）と跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科のコラボレーションイベントで初めて実施した。コミュニケーション文化学科の学外活動として行ったものである。

会場は角川武蔵野ミュージアムの読み聞かせコーナーで、幼児から学童までの年代の親子を対象に当日会場を訪れた人は誰でも参加できる（参加者は角川武蔵野ミュージアムの入場料を払っている）。跡見学園女子大学は月に2回開催するうちの1回を担当する。初年度はコロナ禍が一段落した9月からスタートした。3月までの毎月1回で合計6回実施した。（12月は担当者がコロナ感染の可能性があり学外の方の代行とした。）一回20分～30分程度の時間の中で3冊の絵本を読む。午前10時30分と午後1時からの1日2回の読み聞かせイベントである。

跡見学園女子大学の学生の語り手は、コミュニケーション文化学科吉田ゼミの4年生の二人で、月替わりで交互に担当した。角川武蔵野ミュージアムの担当はミュージアムの図書スタッフを中心に、当日は都合5人のメンバーが会場を担当した。

当初、角川武蔵野ミュージアムの担当者から読み聞かせイベントを打診された文学部現代文化表現学科の富川淳子教授が、このイベントの角川武蔵野ミュージアム担当者との調整にあたった。読み聞かせの指導は、NHKで「おかあさんといっしょ」のお兄さん、お姉さんの指導をしてきた渡部が担当した。

2022年8月に始めての読み合わせを行った。作品は以下の4冊である。

「ふくながじゅんぺい さく、たかしまてつを え」の「おててだあれ？」

（株式会社 KADOKAWA 発行）

読み聞かせと手遊びが同時に楽しめる作品である。語り手は、幼児に絵本を見せつつ手遊びを教えながら、聞き手の幼児の習得度を見極めてお話しをする、という心くばりが必要になる。「おてて おてて おてて だあれ？」の4拍の歌い聞かせのリ

リズム感が、複数の聞き手をまとめていく導入になる。2歳から4歳向けの作品で、語り手が乳幼児をいかに惹きつけるか、リズムと対面性を要求される作品である。

「6ぴきのカエルとひえひえのよる」「作・つるたあき」（株式会社 KADOKAWA 発行）

イラストが細部まで丁寧に描かれている絵本である。語り手は、地の文と会話文を語り分けることでシーンを立体的に表現することが求められる。使われている文字のサイズの大きさによって表現の変化をつけて聞かせたい。緻密に書かれているイラストを題材にフリートークでシーンを広げることにも心を配りたい。作品の舞台の冬の寒さを聞き手に体感させるような語り口と、カエルの冬眠という知識を伝える力、丁寧に描かれたカラフルな「絵」を活かした伝え方が求められる。

「ねえ、きいてみて！ みんな、それぞれちがうから」

「ソニア・ソトマイヨール 文 ラファエル・ロペス 絵 すぎもとえみ 訳」

（株式会社汐文社発行）

「みんなとちがうことをしている子は、そのわけをきいてみて。」という投げかけが、一人ひとりが違うことに気づき、障害とされるものをごく一般的なものとして互いに知る大切さを伝えている。「みんなちがって、みんないい」という金子みすゞの世界に通じる。外国の作品を翻訳したもので、言葉がやや難しく小学校低学年以上にならないとなかなか理解できないレベルと言える。内容は、今の時代にぴったりなので、読み聞かせに参加する子供たちの年齢によって使い分ける判断が求められる。

「ウッチョパスのカレーライス」「さく・のぶみ」（株式会社 KADOKAWA 発行）

作者ののぶみさんの「歌いながら よんでね！」というガイドに従って、歌ったり読んだりしながら聞かせたい。トイレとカレーが意味深なニュアンスで、そこを子どもに何気なく伝えたい。登場人物の声を使い分けるように。語尾を作者がわざと个性的に表現しているので、それを生かす語り口が欲しい。たくさん書かれている「カレー」は指さしながら、特徴的なものと「かれし」など謎のものをお話の中で子どもに投げかけられるとよい。当初、この作品は保護者から疑問が投げかけられるのではないかと、控えていたが、その後の角川武蔵野ミュージアムとの話し合いで使用することで合意した。

会場は、角川武蔵野ミュージアムの読み聞かせコーナーである。子供たちは床のカーペットに座る。お話しのお姉さん（学生）は、椅子に腰かけたり、子供と同じソフトカーペットに座ったりして、子供たちに絵本が見えるような高さに持って語る。

いずれも、参加者の年齢層のばらつきや保護者の協力など、当日の状況に即した対応が求められることが大きく学生にとっての負担も大きいですが、その分やりがいもあった。大学4年生と言えども、実際に幼児を扱ったことは皆無で、年齢層の異なる幼児と保護者にどう向き合ったらいいのかを模索するところから始まった。第1回と第3回は渡部が立ち会い、第2回はコミュニケーション文化学科の吉澤京子教授、ゼミ担当の吉田さち准教授、コーディネーターとしてこの講座の開設に尽力いただいた現代文化表現学科の富川淳子教授が立ち会い、大学側の援助とした。



©角川武蔵野ミュージアム

2022年11月23日の様子 写真提供・角川武蔵野ミュージアム 場所・角川武蔵野ミュージアム読み聞かせコーナー この日は乳幼児が多く「おててだあれ」など低年齢向けの絵本を読み聞かせた

## 実施状況

・2022年7月20日（水） 角川武蔵野ミュージアムの読み聞かせイベントについて初め

での学部内打ち合わせ（Zoom）を実施した。富川淳子教授からの主旨説明があり、吉澤京子教授と渡部が参加して、語り手についてゼミからの募集をすることを決めた。これを元にそれ以降語り手の募集を行い、吉田さちゼミから4年生ふたりが決まった。就活が終わり自由に時間が使えることと、大学にとっても初の試みであり読み聞かせというスキルを習得して公の場に立って機能できる年齢ということを考えての起用となった。

- ・ 8月4日(木) 読み聞かせの個人レッスンを、午後3時間大学内教室にて実施した。絵本の手配が直前となったため読み込みの時間が少なかった。角川武蔵野ミュージアムの担当者が見学して内容を確認した。二人が急速に上達する姿を見て「これなら大丈夫」との感想であった。
- ・ 事前下見と会場打ち合わせ 9月2日、角川武蔵野ミュージアムの読み聞かせ会場で、打ち合わせを実施した。角川ミュージアムの担当者2名が同席した。ここでは、子ども目線に絵本を持って行くためのプレゼンテーションの仕方を話し合った。読み手の学生二人の手ごたえや難しかった点などを事後に聴き取った。大学の教室で練習しているのとは全く違う、という感想であった。担当する学生本人による現場の下見の大切さが確認できた。
- ・ 読み聞かせの本番 第1回は9月22日（水）に実施した。午前10時30分からと午後1時からの2回公演で行った。この日は午前の回には10人ほどの親子が参加したが、午後の回には参加者が集まらなかった。初回ということもあり時間になっても参加者がいない時には中止となる。
- ・ 第2回は10月23日（日）で観客は大入りとなった。この日は午前、午後の2回公演を行った。小さなお子さんは母親に抱かれた乳児もいて、読み聞かせが分かるかどうか心配されたが、それなりに聞いてくれた。
- ・ 第3回は11月23日（水・祝）に実施した。この日も観客は多く、読み聞かせイベントは順調に滑り出した。
- ・ 尚、読みきかせイベントでは、下記の場合に抗原検査をすることになった。①イベント当日体温を測り、平熱より2分以上体温が高い又は体調に不安がある場合、抗原検査を行う。②体温、体調共に通常通りであれば、抗原検査を行う必要はない。
- ・ 第4回は読み手にコロナ感染の疑いが発生し、直前にこのメンバー以外の方に交代が頼めたので跡見女子大のメンバーは休止とした。

## 2023年度に向けて

- ・12月初旬のコミュニケーション文化学科の教員の呼びかけで、来年度（2023年度）の読み聞かせ希望者が6人いることが分かった。12月9日に全員が集まり、読み聞かせの内容とこれまでの経緯などについて説明会を実施し、意思を確認した。その後さらにひとり希望者が加わり7人となった。全員が現1年生（新年度2年生）で、新座キャンパスに通学している。
- ・12月7日（水）「読み聞かせ」イベントの角川武蔵野ミュージアムと跡見学園女子大学のメンバーによる2023年度の計画打ち合わせが行われた。双方が、来年度の継続を希望し、スケジュールなどについて前向きに検討していくこととし、以下のような内容で合意した。新2年生の担当者は春学期が始まらないと授業が確定しないことから、4月と5月については土日祝日など可能な曜日を設定し、この間は跡見学園女子大学の学生以外で担当できる方をお願いをすることで進める。なるべく4月と5月で全員が発表経験を積む。スタート時は渡部が立ち会いフォローする。また6月以降は、授業との具合を検討しつつウイークデーもできるところがあれば、学生単独で担当することも視野に入れる。7月は期末試験を視野に前半の担当をお願いする。8月第2週以降は夏休みになるため9月までは柔軟なスケジュールで実施する。秋学期になれば時間に余裕ができるため、ウイークデーの担当も可能になることが考えられる。

以上のことを含め2023年度も継続していくこととする。